



内モンゴルの干ばつ被害と遊牧民の生活様式の変化に関する研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-12-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿拉, 坦雅 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15118/00005119

氏名	アラタントヤ 阿拉坦图雅
学位論文題目	内モンゴルの干ばつ被害と遊牧民の生活様式の変化に関する研究
論文審査委員	主査 教授 土屋 勉 教授 木幡 行宏 准教授 有村 幹治

論文内容の要旨

現在、産業の発展、自然開発および環境破壊などにより地球温暖化が進み、世界中で様々な自然災害の発生が増加し、多くの人命や財産が失われ、大きな影響を与えている。

本研究では、中国北部に位置する内モンゴルの自然災害の種類と被害状況に着目し、内モンゴルでも雪害、黄砂、干ばつなどの様々な自然災害があり、この中で頻度が高いのは干ばつ、黄砂と雪害であり、そして特に草原の干ばつが深刻で、遊牧民の生活に多大な影響を与えていることが明らかとなった。遊牧民は元来ゲルでのみ生活していたが、定住政策によって生活様式が多様化するようになった。そこで本研究では、遊牧民の生活様式と干ばつ被害の対応を分析し、より現実的で望ましい生活様式を提案することを目的とした。

本研究は、5章から構成されている。第1章では、本研究の背景、目的と研究方法を整理し、関連既往研究に対する本研究の位置づけを示した。第2章では、内モンゴルの遊牧民の生活状況と災害被害状況を示した。第3章では、さらに内モンゴルの干ばつ地域であるスニテ右旗における遊牧民の生活実態調査を明らかにし、第4章では、スニテ右旗の住居形態と干ばつ被害率との関連について統計的分析を行った。第5章は、各章を総括し、内モンゴルの自然災害の中で最も深刻になりつつある干ばつが遊牧民の生活に与える影響をまとめ、住居形態に関連している水の確保問題、飼育設備、経済状況などの今後の課題を検討した。

本研究の結果を総括すると次のようになる。干ばつ地域を対象に、遊牧民の生活実態調査を行い、これによって定住政策と土地の分配によって、ゲルから土造家屋、

レンガ造家屋，更にゲルを併用する居住形態も現れ，さらに自由に移動する遊牧方式から，限られた土地の中で短距離移動の遊牧という牧畜形態が現れたことを確認した。そこで，この多様な住居形態と干ばつ被害率との対応を分析すると，レンガ造家屋の干ばつ被害率が最も低いという結果を得た。しかし，レンガ造家屋だけに定住して行われる放牧方式では過放牧を助長し，将来的には草原の砂漠化を進行させることが予想される。レンガ造家屋とゲルの併用式生活も，レンガ造家屋と被害率に有意差がないことから，この地域での現実的な生活様式として，レンガ造家屋とゲルとの併用式的生活様式が一番望ましい牧畜方式であると考えられる。また，生活様式と関連する水の確保，飼育設備，経済状況などの要因も被害率の低下に寄与していることが推察された。

ABSTRACT

In recent times, numerous natural disasters have occurred around the world, affecting both human life and property. Industrial development and the ensuing global warming are known as lead causes of this and they will continue to adverse effects on natural development and result in more environmental disruption.

In this study, we focus on the inner Mongolia autonomous region in the north part of China. There, various types of natural disasters have eventuated, such as snow damage and yellow sand, due to drought in this area. Drought has a particularly devastating effect on the nomadic people living on the grassy plains, as these plains are severely damaged by drought. Originally, nomadic people lived only in Gel, but their living style diversified after a change in the settlement policy of the Chinese government. The purpose of this study is to provide a detailed outline of the changes in their lifestyle. To do this we analyze the relationship between drought damage and the changes it brings to the lifestyle of nomadic people.

This thesis has five chapters. The first chapter outlines the background, purpose and methods used in addition to how this study is placed in relation to past studies. The second chapter reports on the level of disaster damage and details the lifestyle of nomadic people in inner Mongolia. In the third chapter,

the present situation of the nomadic people in the Sunite right banner region, which is drought-affected, is described. Drought damage ratio and its effects on several life factors are analyzed, with emphasis on the statistical analysis between the drought damage ratio and house form occurring in the forth chapter. The fifth chapter contains concluding remarks where I propose the optimal house form and live stock farming method based on the outcomes of this study.

This study has the following findings. It is confirmed that the policies of settlement and land distribution to nomadic people have resulted in house forms of several types, namely traditional Gel; mud house; brick house and a communal type house which the Gel use together. It is also apparent that a live stock farming method called short-range mobile nomadism, which involves limited movement across the land, has emerged instead of free –range mobile nomadism. From a statistical analysis of damage rates when housing styles are compared, we can conclude that the brick house's life style results in the lowest damage rate of the various house types. However, the brick house's living style seems to result in excessive pasturing and therefore expanded desertification in the future will be seen. Ideally we wish to avoid this occurring, and the study shows there is no major difference in the damage rate when the communal type house which the Gel use together is used. Hence it is suggested that the communal type house is the most appropriate and realistic life style to be used with the live stock farming method in this area. In this study, it is also assumed that the securing of water, breeding equipment and economic conditions contribute to the deterioration of the damage ratio as is shown by correlation analysis.

論文審査結果の要旨

本論文は、中国北部に位置する内モンゴルで発生する自然災害の内、干ばつが遊牧民の生活に多大な影響を与えている現状を明らかにした後、定住政策や土地の分配政策によってゲルのみで生活していた遊牧民の生活様式が多様化した点に着目して、干ばつ被害と遊牧民の生活様式の対応を分析し、より現実的で望ましい生活様式を提案したものである。

最初に、本研究の背景、関連既往研究に対する本研究の位置づけを示した後、内モンゴルの遊牧民の生活状況と種々の災害被害状況を示し、特に干ばつ被害が深刻であることを明らかにした。

次に、干ばつ被害の深刻な地域としてスニテ右旗を特定し、この地域の遊牧民の生活実態調査を集中して実施した。干ばつ被害とは家畜の被害であることから、その対策は飼料備蓄が一般的であるが、家畜頭数の増大は過放牧を助長して干ばつ被害を深刻化させることが推察された。そこで、49世帯の調査データに基づいて、干ばつ被害と諸データとの関連を検討した。クラスター分析では、調査世帯は井戸の有無、あるいは5つの住居形態で分類して干ばつ被害の対応を検討し、更に、放牧方式、飼料備蓄、家畜頭数、住居形態と被害率との対応を検討した。その結果、干ばつ被害率は井戸が有り、レンガ造家屋やゲルとレンガ造家屋の併用式住居で低いが、飼料備蓄があっても被害率が高くなる傾向が認められた。そこで、飼料備蓄の有無と、被害率、家畜頭数との対応を分析すると、飼料備蓄が行われても家畜頭数が少ないと被害率が高く、家畜頭数が多ければ飼料備蓄が無くても被害率が低くなる傾向が示された。また、住居形態との対応を見ると、土造家屋では被害率が高く家畜頭数が少ない傾向にあり、レンガ造家屋では被害率が低く家畜頭数が多い傾向にあった。

このように多様な住居形態が存在する中で、レンガ造家屋で干ばつ被害率が最も低い結果が得られたが、レンガ造家屋だけに定住する方式では過放牧を助長し、将来的には草原の砂漠化を進行させることも予想された。そこで、レンガ造家屋とゲルの併用式生活の被害率もレンガ造家屋と大きな有意差がない分析結果であることから、この地域での現実的な生活様式はレンガ造家屋とゲルとの併用式が望ましいことを示した。

以上要するに、本論文は調査困難地域である内モンゴルの干ばつ被害と遊牧民の生活様式の対応を分析し、より現実的で望ましい生活様式を提案したものであり、学術的価値が認められる。よって、著者は博士（工学）の学位を授与される資格があるものと認める。